

たび 旅ゆくしんらん

■ 楽曲データ

歌詞：釜瀬春鳳 作詞

楽曲：升田徳一 作曲

発表：安芸教区高宮組仏教婦人会連盟 1962年

初演：「安芸教区仏教婦人会連盟代表者の集い」 1962年9月9日 見真講堂

初出：『めぐみ』1963年3月号 浄土真宗本願寺派仏教婦人会総連盟事務局

管理番号：M0305

■ 創作の経緯

舞踊劇『旅行く親鸞』のために制作された五部作のなかの1曲。1989（平成元）年に中央布教大会における合唱（現・御堂演奏会）でとりあげられ、全国へ普及したといわれる。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第2巻収録

底資料：『佛教讃歌』本願寺出版協会 1973年

比較資料：—

校訂の詳細：特記事項なし

■ 解説

◆ 歌詞について

歌詞は時間的な経過を追って書かれており、平安末期から鎌倉時代中期にかけての動乱のなかで、お浄土への道を一步一步、人びとと共に歩まれた親鸞聖人のお姿を描いています。

1番はお念仏のみ教えが無碍の一道であり、水火二河の間に開けた小さな白道であること、2番は迷い多き凡夫の人生、その無明の闇に灯をかかげて照らしてくださること、3・4番は阿弥陀さまのお慈悲のなかで、ひたすら真実を求めてけわしく厳しいご一生を生き抜かれたこと、そして5番は、ご往生の様子を歌っています。「夕陽のような人でした」という言葉に、作詞者の万感の想いが込められているようです。

わかりやすい詩ですが、聖人のご苦勞を偲び、その情景が眼のあたりに浮かぶよう、ご一生をよく学んで読みましょう。

宗祖親聖人のご一生をテーマとした仏教讃歌は数多くありますが、この《旅ゆくしんらん》も、よく歌われる作品のひとつです。

◆作詞者・作曲者について

作詞の釜瀬春鳳（1905～1984）は、島根県邇摩郡に生まれ、真宗木辺派の学僧として活躍しました。広島・山口・北九州地方の本願寺派寺院とも、ずいぶん交流があったようです。

作曲の升田徳一（1911～1994）は広島市生まれ。中学を卒業後、いったんは就職するものの、音楽を求める心を断ち切れず、周囲の反対を押し切って武蔵野音楽大学で声楽を学びました。その後、戦前は京都成安女子学園（現・京都成安学園）や広島女学院、戦後はエリザベト音楽大学などで教壇に立ったほか、NHK広島放送合唱団の指導育成にあたりました。

この曲で用いている6/8拍子について、作曲者は、「柔らかく、うねりがあって心静かに歌うのにはとてもよい拍子だと思っております」と述べています（「巻頭言 音楽をする心」『仏教音楽』第27号、仏教音楽研究所〔現・浄土真宗本願寺派総合研究所仏教音楽・儀礼研究室〕、1993年）。

◆歌い方について

- ①「流れるように」という指示があり、テンポは付点四分音符＝52に設定されています。あまり遅くなると歌の生気がなくなるので、テンポに注意して。
- ②6/8拍子なので、付点四分音符を1拍、1小節を大きな2拍と感じましょう。ブランコの揺れを参考にしてください。
- ③各節の3行目に、「しんらんさまでありました」という言葉がでてきます。ここに向けて、冒頭から徐々に盛りあげていきましょう。
- ④1小節目3拍目、16分音符の歌い方に注意しましょう。あわてないで、最初の音符を少し長めに。7小節目6拍目、10小節目3拍目も同じです。
- ⑤6小節目には取りにくい音程とリズムがあります（2・3拍目の「ド」→「ミ」）。低い音を探らないように気をつけて。また、7小節目後半の下降する音型も急ぎやすいので、付点8分音符の長さを十分に保ってください。
- ⑥9～12小節目は、親鸞さまへ思いを馳せて、のびのびと歌いましょう。

◆用途

降誕会や報恩講の折に全員で唱和できれば、法座の意味がより明らかになるでしょう。連続研修などで、聖人のご一生を学ぶ際の導入教材としても適しています。

音源は、CD『ひかりあふれて』（カラオケ付）やCD『日々のうた 念仏』に収録されています。

解説執筆：大分哲照（御堂演奏会指揮者 福岡教区西嘉穂組明圓寺住職）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 18（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第143号収録）を加筆・修正のうえ、転載。